

漢字から読み解く「可能」の意味

——中国語の“能”を中心に——

安本真弓

普段何気なく使っている言葉について、その意味はどこから生まれ、どのように変化し、次第に定着するようになったのかを考えたことがあるだろうか。日本語で「～できる」意味を表す漢字は「出来る」となるが、中国語では代表的なものとして“能”⁽¹⁾が挙げられる。日本語の「出来る」という漢字からは、「何かが出て来る」と連想することができ、この「何か」は人や物を指す場合もあれば、動作を指すこともあると考えられる。つまり、「動作が出て来る」から、その動作はすることができると一歩踏み込んだ認識をすれば「動作が出て来る」の意味に拡張し、「～出て来る」が「～出来る」となるわけである。これは詳細な考察を待たれ、確実なことは何もいえないが、それに対して、中国語の“能”は果たしてどのようにして「～できる」の意味を獲得し、現代中国語においては「可能」を表すものとして活躍の場を与えられるに至ったかを検討したい。

1 はじめに

現代中国語で漢字“能”は以下の文において使われる。

- (1) 他是一个大能人。
(訳：彼はよくできた人である⁽²⁾)
- (2) 我们这里讲究的是能者多劳。
(訳：ここではできる者がより多く働くことを求められる)
- (3) 你能说日语吗？
(訳：あなたは日本語が話せるか)
- (4) 今天身体不舒服，所以不能去接你了。
(訳：今日は体調が悪いから、あなたを迎えに行くことができない)
- (5) 这里不能抽烟。
(訳：ここではたばこを吸ってはいけない)

- (6) 穷人能搞好科研吗?
(訳: 貧乏人は研究調査をしっかりとやれるのか)
- (7) 这么点东西, 能吃得饱吗?
(訳: たったこのぐらゐの物で、お腹一杯食べられるか)
- (8) 能看出他是个优秀的技工。
(訳: 彼は優秀な技術者だと見てわかる)
- (9) 幼儿园的题目, 大家能做得出来吗?
(訳: 幼稚園の課題は、みなさんやれるか)
- (10) 老师说的话, 你能听懂吗?
(訳: 先生の話、あなたは聞いて分かるか)

“能”は「才能あるいは能力」を表す(例(1)(2))以外に、例(3)~(10)のように助動詞(auxiliary verb)⁽³⁾として用いられて「可能」の意味も表す。上記に示したように、“能”の具体的な用法は多岐にわたり、いずれも「可能」の意味を表すには違いないが、多くの専門家たちからも、“能”の表す「可能」には様々な意味項を持つとの指摘がなされている。ここで問題となるのは、“能”の様々な意味項が如何なる変化を成し遂げてきたのかという点である。そこで本稿は、古い年代の漢語史料に基づき、また“能”に関する様々な先行研究を踏まえたうえで、漢字“能”の由来を歴史言語学の立場から検証する。さらに、“能”が「可能」の意味を獲得した過程を考察し、同時に“能”が表す様々な「可能」について各意味項間の関係をどう捉えるべきかを意味論的立場から分析する。これにより、漢字“能”の意味に関する歴史的変化過程を浮き彫りにしたい。

2 漢字“能”の成り立ち

漢字“能”の成り立ちに関する先行文献は数多く存在する。まず代表的な研究を概観する。

竇文字・竇勇説⁽⁴⁾では、文字学の角度から次のように述べている。金文における漢字“能”は「熊」の象徴とされ、特に「熊」のまん丸い身体的特徴が際立っていることから、本来の意味は「熊」である。「熊」は冬眠時長期間物を食べないことから、「能力を持つ」という「可能」の意味が生まれ、さらに“才干”(「才能」)や、“胜任”(「任に堪える」)、“应该”(「すべき」)、“能量”(「能力」)などのように意味が拡張される。後の年代における文字の形はその異体字と文

字規範化によるものである。「熊」は会意文字で、“能”と“火”からなる。漢字“能”は初めに「熊」の象徴とされるが、後に能力に関わる意味が多く使われるようになり、“両者の意味を区別するため、下に“火”を加えた「熊」に「くま」の意味を付与した。他の文字を使わずに、“火”をつけて「熊」を表すことにしたのは、「熊」の体内にはカロリーが多く寒さに動じないことを強調するニュアンスがあるからである。漢字に“火”が付いて全体に莫大なエネルギーを持つと理解できることから、火の勢いが強いという意味が生じたわけである。

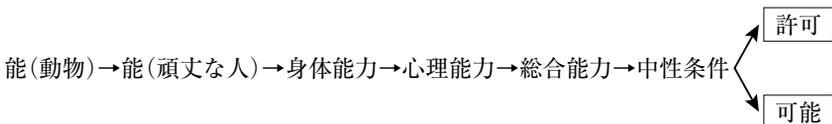
吳福祥説⁽⁵⁾では“能”の各意味項の成り立ちについて歴史言語学の角度から考察している。その結論として、宋代以前に常用していた可能助動詞としての“能”の例文(例(11)～(13))を挙げたうえで、宋代より古い時代の史料では、可能助動詞は、通常動作の実現可能しか表わさず、結果実現の可能を表すのは稀であると指摘している。言い換えれば、この時期の文献に、一般に“Va+Vc”(“Va”は助動詞、Vcは動詞や形容詞からなる、中国語文法における補語)という構造が見られないとしている。

(11) 寡人不佞，能合其众，而不能离也。(《左传・僖公15年》)

(12) 尺表能审玕衡之度，寸管能测往复之气。(《世说新语・言语》)

(13) 谁家能驻西山日？谁家能堰东流水？（卢照邻《行路难》，《全唐诗》，518页）⁽⁶⁾

王红卫説⁽⁷⁾では、言語類型論的角度から見ると、“能”の文法化過程は世界の様々な言語における能願動詞（すなわち可能助動詞）と同じ文法化過程をたどっていると主張している。動物を指すから頑丈な人を指すようになったのは、一種の隠喩投射⁽⁸⁾であり、さらに頑丈な人から能力の優れる人を指すようになったのは一種の推理（あるいは転喩）の働きであるとし、その後、能力の優れる人から心理的能力、心理的能力から総合能力を表すようになり、次第に人の総合能力から外的な客観条件、道義的許可へと変化（意味拡張）してきたと述べている。また、推理はあらゆる言語における能願動詞文法化の主なメカニズムであると指摘している。王红卫説における“能”の意味変化過程の記述をまとめると次の通りである。



これらの論述には一定の説得力を持つが、果たして具体的な言語事実が正しく反映されているのか、別の変化過程は考えられないかなどといった疑問が残されており、大いに議論の余地があると思われる。

“能”の意味項がいくつあるのかについて論じた先行研究も数多く存在するが、紙幅の関係上、ここでは重要と思われる研究文献を概略する。

“能”の意味項は、主に①主観能力（「主観的能力」）、②可能性（「可能性」）、③情理上の許可（「情理的許可」）、④環境上の許可（「環境的許可」）と4つに分類する丁声树等・刘月华・朱德熙説⁽⁹⁾がある一方、①能力（「能力」）、②条件（「条件」）、③该允（「～のはずである」）、④可能（「可能」）、⑤意愿（「願望」）、⑥祈使（「命令」）と6つに分類する吕叔湘・王伟説⁽¹⁰⁾もある。その王伟説は“能”の抽象的な意味合いは“具备克服某种障碍或阻力的使能条件（enabling conditions）。”（訳：ある障碍または抵抗力を克服する有効な条件を備えている）としたうえ、この抽象的な意味合いが異なる言語環境に反映されることにより、具体的な意味が提示されると指摘する。さらに、高橋弥守彦説⁽¹¹⁾は、①評価能力、②回復能力、③分量能力、④到達能力、⑤用途能力、⑥可能性、⑦環境、⑧情理と8つに分類している。

中国の西漢時期の動詞について、モダリティの視点から研究をしている胡伟説⁽¹²⁾によると、“能”は可能を表すモーダル動詞に属し、①表示动力情态 {能力}（「動力モーダルを表す {能力}」）、②表示 {意愿}（「願望」を表す）、平叙文と疑問文のどちらに分布されると分析している。

これらの先行文献による“能”の意味項に関する諸説は、いずれも本稿が“能”の「可能」意味獲得とその変化過程を研究するうえで、何らかの解決の糸口を与え得るために価値あるものである。しかしながら、漢字“能”はどのような過程を経て文法化してきたのか、またどの時期においてどのような文法化が生じたのかといった点で、まだなお納得の行く解釈は得られたといえない（具体的な変化過程に言語事実を無理やり当てはめていると思われるところが散見される）ため、本稿は中国語の歴史的文献を手掛かりに、歴史言語学と意味論の立場からこれらの問題について考察する。

3 “能”「可能」意味の獲得と意味変化過程

まず、歴史的史料に基づき文字の形や意味から“能”の考察を試みる。

これらの史料に基づく、「能」は「熊」に似た動物であって、先行研究において指摘のなされている「熊」の象徴だという見解は間違っているようである。「熊」は体格が大きく強靱で力持ちという印象が持たれる故、それに似た“能”も同様の印象を持たとされる。人々は周りの人やある出来事を目の当たりにしたとき、身体が大きく丈夫な人は小さく弱い人に比べて強く、かつ何か難しいことをこなす際にも器用であるとよく観察される。例えば身体が大きく丈夫な人は比較的早く走る、頭の回転が比較的早い、物事を上手に運ぶことが多いなどといったことを目の当たりにして、こういった経験が度々蓄積されると、これはまるで「熊」に似た動物“能”だと連想が働く。やがて、より踏み込んだ連想をし、「才能あるいは能力を持っている人」、そして「才能あるいは能力を持っている」といった意味と結びつけていき、次第に意味拡張がなされる⁽¹⁴⁾。これはある特徴を持つ動物を表す単語が、似た特徴を持つ人に、さらに抽象化されたその特徴のみに表すようになるため、新意味項と旧意味項との間に関連性を持った意味拡張であるとわかる。また具体的な社会経験が抽象化され高度な認知レベルまでに持ち上げた典型的な例であり、正に段玉裁氏が指摘した通り、仮借の手法を用いた語用的推理であるといえる。西洋伝統の論法⁽¹⁵⁾では、単語の意味変化におおよそ3つのパターン（(1)意味の拡大、(2)意味の縮小、(3)意味の転移）があるとされるが、本稿では“能”の仮借手法は(3)の「意味の転移」だと考える。

次に用例を挙げて具体的な説明を加えていく。

- (14) 曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校。

『全釈1・論語・泰伯第8・05』⁽¹⁶⁾

(全釈訳：曾子の言葉。才能が有っても無い者にたずね、知識が豊かであっても乏しい者にたずね、持っていても無いかのようにし、満ちていてもからっぽのようにし、犯されても仕返しをしない。)

- (15) 子曰、君子病無能焉。不病人之不已知也。

『全釈1・論語・衛靈公第15・19』

(全釈訳：孔子の言葉。君子は自分に才能のないことを気にする。人が自分を知ってくれないことを気にしない。)

- (16) 賢者在位、能者在職、國家閒暇。 『全釈2・孟子27』

(全釈訳：かくして徳ある賢者は用いられてしかるべき地位にあり、能ある人物はしかるべき職について、政治がよく行われて国家が平穩無

事であるとする。)

(17) 中道而立、能者従之。

『全釈 2・孟子 217』

(全釈訳：人を教えるには、最高の標準である中庸の道に立って人を導くのであって、できるものだけがついて行くのである。力のない者はしかたがないのだ。)

例(14)の“以能問於不能”は「才能を持つ人が才能を持たない人に教えを乞う」の意味で、“能”は「才能を持つ人」を指す。一方、例(15)の“君子病無能焉”は「君子は自分に能力がないことを病んでいる」の意味で、“能”は「能力」を指す。例(16)の“能者在職”は「能力を持つ人が要職に就く」の意味で、“能”は「能力を持つ」を指し、例(17)の“能者従之”は「能力を持つ人は之に従う」の意味で、“能”は同様に「能力を持つ」ことを指す。

これらの例文から、次のことがいえよう。漢字“能”は動物を表すものから意味変化し、「才能あるいは能力を持つ人」または「才能あるいは能力を持つ」へと拡張している。この2つの意味はどちらが先に派生したかについて、甲骨文（解読がきわめて困難で、今後の研究を待たれる）を除き、本稿が確認できる古典の漢語史料（現存する最古の文献）では判断できない。しかし、例(16)と例(17)では“能”が後続に“者”を伴って“能者”の形を取り、「才能あるいは能力を持つ人」という意味をより明確な形で表しているのに対して、例(14)と例(16)では“能”が単独で用いられて「才能あるいは能力を持つ人」の意味を表しているが、曖昧で伝わりにくい印象を持つ。よって、敢えてどちらが先に派生したか決める必要があるとするならば、「才能あるいは能力を持つ人」ではないかと推測する。なぜなら、“能”は本来身体が大きく頑丈な動物であり、“人”もまた動物だと考えれば、「才能あるいは能力を持つ人」の意味にひとまず変化するのはつじつまが合うと思われる。後により明確な意味を伝達するために、“能”の意味の文法化がさらに進み「才能あるいは能力を持つ」の意味に転化、後続に“者”を加えてその特徴を持つ人を表すようになったと考えるのが妥当であろう。また、論拠として、本稿が「はじめに」で挙げた例(1)の“大能人”と、例(2)の“能者多勞”という言葉のなかでも、“能”は「才能あるいは能力を持つ」を表し、後続に“人”や“者”を伴ってそういった人を表す。つまり、この分析から明らかなように、古くから今日に至るまで“能者”という言葉が使い続けられ、現代中国語では“能人”という言葉も加えて多用され、それと引き換えに「才能あるいは能力を持つ人」の意味を表す“能”は存在価

値がなくなったのである。

続いて、“能”が「才能あるいは能力を持つ」または「才能あるいは能力を持つ人」から、如何なる意味拡張を経て、「ある事柄をする能力を持つ」を表すようになったのかを考察する。

(18) 禮之中焉能思索、謂之能慮。禮之中焉能勿易、謂之能固。能慮能固、加好之者焉能聖人矣。 『全釈8・荀子上・禮論篇5』

(全釈訳：礼の規範の範囲内でよく思索するのをよく思慮するというものであり、礼の規範の範囲内でよく節操を変えないのをよく堅固であるというのである。よく思慮し、よく堅固であるうえに、さらにこの礼を愛好する者、これこそは聖人である。)

(19) 既錯而人莫之能誣也。 『全釈8・荀子下・王霸篇5』

(全釈訳：すでにこうした一定の基準が置かれたからには、誰もいいかげんにごまかすことができない。)

(20) 道者何也。曰、君之所道也、君者何也。曰、能羣也。

『全釈8・荀子下・君道篇5』

(全釈訳：道とはなんであるか。答えて言う、君主の従うものである。君主とはなんであるか。答えて言う、よく衆人を集団生活させることのできる者である。)

例(18)の“禮之中焉能思索、謂之能慮”は「礼の規範内で考えることができる、すなわちそれを思慮できるという」⁽¹⁷⁾の意味、ここでの“能”は「ある事柄をする能力を持つ」を指し、同例文中の“能固”、“能慮能固”も同じ用法である。例(19)の“既錯而人莫之能誣也”は「仮に過ちを犯せば、誰もごまかすことができない」の意味、ここの“能”も「ある事柄をする能力を持つ」を指す。例(20)の“曰、能羣也”は「曰く、大衆を集めることができる」の意味、ここの“能”も同様に「ある事柄をする能力を持つ」を指す。

“能”は「才能あるいは能力を持つ人」または「才能あるいは能力を持つ」を表すようになってから、人々は周りの物事を観察することで、才能あるいは能力を持つ人は持たない人に比べ、往々にして物事を容易にこなすことができるのを知る。歌を唄うことを例にすると、生まれつきに音痴な人、すなわち歌唱能力がない人は後天の努力で多少うまく歌えるようになるが、しかし才能のある人は何ら努力もせずに上手に歌えてしまう。こういった社会経験を大いに

蓄積されると、人々が「才能あるいは能力を持つ人」を「ある事柄をする能力を持つ人」と結び付け、徐々にこういった意味へと拡張される。「能」の「才能あるいは能力を持つ人」から「ある事柄をする能力を持つ人」への意味拡張については、両者間に非常に密接な関係を持ち、共通の特徴として「才能あるいは能力を持つ」と捉えることができるため、前述した意味変化のパターン(1)「意味の拡張」であるといえよう。ここで注目すべきは、意味の面で両者の間には密接な関係があるものの、品詞区分に大きな変化が生じていることである。この意味変化により、「能」は名詞から動詞の前に置く助動詞となり、且つ品詞変化で新たな高度な認知的意味が引き出され、「可能」の意味を表出するようになり、これがまさに「能」の「可能」を獲得するに至った過程であると考えられる。なお、楊伯峻・何乐士説⁽¹⁸⁾によると、古典漢語において可能を表す助動詞には漢字“克”(現代中国語においてすでにその意味が廃れた)もあり、出現が一番早く、また漢字“能”についても比較的早期に出現し、現在に至るとある。本稿の分析からも明らかのように、“能”の「可能」意味の獲得過程には人々の世界に対する認知活動が大いに関わっていて、その認知能力の支えがあった故、“能”が「可能」の意味を獲得でき、現在においてなお使用されるのである。

例(18)から(20)における“能”は「ある事柄をする能力を持つ」を表す文であったが、続いて次の2例における“能”の意味を分析したい。

- (21) 匪言不能、胡斯畏忌。 『漢詩体系第二巻・詩經下・大雅・桑柔』
 (全訳訳：私は諫諍して言うことができないのではない。諫諍の言を為すことも出来るが、今何でここに王の暴虐を畏れて、これを忍み憚るのであるか。それは、群臣が皆狂して以て喜ぶという者ばかりであるので、到底我が言に耳を貸す風が少しも考えられないからである。)
- (22) 不以規矩，不能成方圓。 《孟子・離婁上》
 (全訳訳：規矩をもってせざれば方圓を成すあたわず)

例(21)の“匪言不能”は「(私が)諫言することができない」の意味で、ここで“能”はある判断を行ったことを表している。その判断とは、自分自身が置かれている周りの情勢から、私が諫言しても、誰一人聞いてくれる者がいないと見て取れるので、諫言できないことである。つまり、“能”の表出する意味は「一定の条件下、ある人がある事柄をする能力を持つか否か」となる。例

(22)の“不能成方圓”は「方円を成すことができない」の意味、「仮にこの「規矩」という道具を使わないと、方円を描くことができない」という判断を下しているのである。よって、“能”は同様に「一定の条件下、人がある事柄をする能力を持つか否か」という意味になる。

では、例(21)(22)で導き出した構文的な意味と、例(18)～(20)の「ある事柄をする能力を持つ」とはどういった区別があるのか、ということと実際は根本的な違いがないと考える。例(21)と(22)の分析では判断を行ったことを加えたに過ぎない。この判断はどこから来るものなのかということ、取り上げた例文の内容によるものである。例(18)～(20)の文では、ただ「ある事柄をする能力を持つ」ことだけをいい、具体的にどんな条件下で行われるかは話し手の関心事ではないため、省略されているのである。さらに、当該例文の前後を少し広げれば何らかの条件などが現れる可能性は十分あり得る。これに対して例(21)と(22)では、どんな条件下である事柄が実現できないかを説明したいため、条件が提示されるのは当然なことである。よって、例文の内容に従って読み解いていくと、“能”は「ある事柄をする能力を持つ」の意味以外に、話者が判断も行っているとみえる。これは単に具体的な文の内容における見かけ上の違いであって、語用上の結果に過ぎない。ここまでの分析を整理すると、例文によって、「一定の条件下」が現れたり現れなかったりするものの、文意を詳細に考察すると、具体的な条件は必ず存在するため、本稿は“能”の構文的意味を「話し手が一定の条件下、ある事柄をする能力を持つか否かを判断する」と概括する。

ここで「一定の条件」とは何かについて考える。「ある事柄をする能力を持つ」を掘り下げてみると、「能力を持つ」とは「人がある種の能力を持つ」を指すことが多い。ある種の能力があれば、ある事柄がやれる、すなわちある事柄を実現でき、そうでなければ、実現できないとなる。こうなると「人がある種の能力を持つ」も「一定の条件」と見なすことができ、先ほど述べた外的条件、例えば「自分自身が置かれている情勢」などと異なり、動作主が本来持っている能力としての内的条件となる。そこで、「一定の条件」が含意するものは、あることの実現に必要な様々な内的条件（主に動作主自身の能力など）及び外的条件（当該動作を行う際に必要な様々な外的条件（例えば環境や、規定など）となる。

さらに“能”の各意味項の変化過程について分析を進める。前述の王紅卫説によると、“能”が「可能」の意味を獲得した後も、いくつかの意味変化過程を経ていたというが、本稿はこれには賛同する立場を取らない。“能”は「あ

る事柄をする能力を持つ」に意味拡張してから、多様な言語環境に自由に運用できるようになると考え、筆者が把握している古典の言語史料を考察しても、その結論に至る。たとえ史料によっては意味項の出現時期に前後関係が確認できるからと、ある意味項が先に使われ、ある意味項がその後に変化してきたと結論付けるのは安直であり、文献史料の内容のなかで、一部の言語環境に及ぶことがなければ、その意味項の使用はなかったと解釈すべきである。言い換えれば、あらゆる言語環境さえ整えば、すべての意味合いが同時期に使われることも可能であると考えべきである。

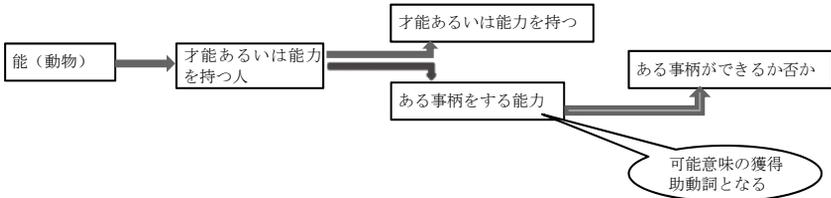
次に興味深い例文を1つ取り上げたい。

- (23) 自古及今、未有二隆争重而能長久者。『全釈8・荀子下・致士篇7』
 (全釈注：昔から今日まで、二人の最も尊い者が権力を争って、それでいてその社会が長く栄えることができたというためしはないのである。)

例(23)の“未有二隆争重而能長久者”は「二人の大物が権力闘争すると世の平和が長続きをすることはなかろう」という意味である。ここでは、今まで挙げた例文と異なり、人に対して何らかの判断をするのではなく、ある事柄に対する判断を行っている。この“能”は「話し手が一定の条件下、ある結果が現れるか否かの判断を行う」といった構文的意味として解釈できる。これは人々が長期にわたり周辺の人、モノを観察する際、人に着眼点を置くこともあれば、物事に着眼点を置くこともあると考えられ、様々な観察より蓄積された経験から「可能」という概念が形成され、それを言葉として表現しようとした結果、漢字の“能”を借りてその役割を担わせたわけである。そこで、人が何かの能力を備えているから何かができることと、条件が備わって物事に何らかの結果が表れることを「ある事柄が出て来る」といった意味に概念化する。これは日本語の「可能」を表す漢字「出て来る」と驚異的な一致を見せ、まさに奇遇であるかのようなのだが、実は人類が基本的概念に対して共通認識を持っている具体的なケースであるといえよう。したがって、本稿では前述の漢字“能”の構文的意味を改めて、「話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する」とする。

ここまでの考察から、漢字“能”の「可能」意味の獲得と意味変化過程は下記のように示すことができる。

図表(4) “能”「可能」意味の獲得と意味変化過程



4 漢字“能”各意味項間の関係

第2章の先行研究で見てきたように、漢字“能”の意味項の分類については2つ、4つ、6つ、8つなどと様々な意見が存在するが、本章では各意味項間に果たして何らかの関連性があるのか、あるならばどういった関係性を持つのかを検討したい。ここでは、代表的な先行研究として比較的詳細な記載がなされている『現代漢語八百詞』のなかの用例を中心に取上げて検証を試みる。

意味項①する能力を持つ、または条件が備わることを表す

(24) 我们今天能做的事，有许多是过去做不到的。 (《八百詞》例)

(われわれが今日にできることの多くは過去にはできないのである)

(25) 因为缺教员，暂时还不能开课。 (《八百詞》例)

(教員が足りないから、しばらくの間はまだ授業を開講することができない)

例(24)は人々自身の能力、すなわち内的条件が備われば、ある事柄（何らかのことができる）ができる、例(25)は教員が足りないという外的条件のため、ある事柄（授業を開講する）ができないと、それぞれ分析できる。よって、いずれも「話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する」といった構文的意味であろう。

意味項②何かに長けていることを表す

(26) 我们三个人里，数他最能写。 (《八百詞》例)

(私たち3人の中、彼が一番書くことができる)

例(26)は3人の中で他の2人に比べ、彼の文章力が一番高いという内的条件

において、ある事柄（書くこと）は彼が一番できると分析できる。これも「話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する」といった構文的意味であろう。

意味項③ある種の用途を表す

(27) 橘子皮还能能做药。 (《八百词》例)

(ミカンの皮はまた薬にできる)

例(27)は物事の性質を描写している。ミカンの皮はある効能を持っているという内的条件で、ある事柄（薬になる）ができると分析できる。同様に「話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する」といった構文的意味であろう。

意味項④可能を表す

(28) 满天星星，哪能下雨？ (《八百词》例)

(空いっぱいの星で、雨は降ることがなからう)

例(28)は、空には星がいっぱいあるという外的条件下で、ある事柄（雨が降る）が発生し得ないと分析できる。これも同様に「話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する」といった構文的意味であろう。

意味項⑤情理的許可を表す

(29) 我们不是发起单位，这个会能参加吗？ (《八百词》例)

(我々は発起団体ではないが、この会議に参加できるか)

例(29)は疑問文として、我々が発起団体ではないという内的条件（グループの属性）で、ある事柄（会議に参加する）ができるかと分析できる。同様に「話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する」といった構文的意味であろう。

意味項⑥環境的許可を表す

(30) 这儿能不能抽烟？

—那儿可以抽烟，这儿不能。 (《八百词》例)

(ここで煙草を吸うことができるか

—あそこは吸ってもいいが、ここはだめだ)

例(30)は、ここではなく、あそこは喫煙エリアであるという外的条件で、ある事柄(煙草を吸う)ができると分析できる。同様に「話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する」といった構文的意味であろう。

以上の考察から、いずれの意味項においても「ある事柄ができるか否か」という最も基本的な意味特徴が浮き彫りになった。さらに、「可能」の意味を持つ漢字“能”は「話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する」という構文的意味を担っているといえよう。ここでいう「一定の条件」とは、人々自身の能力や、物の性質・性能、グループの属性などといった内的条件に加え、環境や規定などあらゆる外的条件を指す。また、判断するうえでの基準は、人々が世界に対する認識の経験値である。安本(2009)(19)では次のように指摘する。歴史の流れの中で、人類が一定の生活基盤において、現実世界の観察を通してたくさんの認識経験を得る。例えば、人がある能力を持っていればある動作ができる、またはある条件が備わればある結果が出て来る、といったことを繰り返し体験することで、人々が言語形式でそれを表現しようとしたことが、可能表現のルーツである。そして、従来存在しなかった「可能」という概念を、中国語では漢字“能”を借りて、日本語では漢字「出来る」を借りて表現したのではないかと本稿は考える。

5 おわりに

イ) 漢字“能”は、古くから「熊」に似た動物を表すことだったが、ある時期から「才能あるいは能力を持つ」または「才能あるいは能力を持つ人」に意味拡張する(どちらが先かは収集した現存史料では判明不可能)。やがて、「才能あるいは能力を持つ」から文法化が進み「する能力を持つ」に変化し、品詞においても動詞から助動詞へと変化を遂げ、漢字“能”は「可能」の意味を獲得する。また、文法化した助動詞“能”の文中における意味(いわゆる構文的意味)は「話し手が、一定の条件下、ある事柄ができるか否かを判断する」とし、この「一定の条件」とは人の能力、物の性質などの内的条件と、あらゆる環境的要素とする外的条件を指し、判断基準とするのは人々の世界に対する認識の経験値であると考えられる。

ロ) 現在の文法学者は助動詞としての“能”に様々な意味項を付与しているが、内実を考察すると、いずれも「ある事柄ができるか否か」の意味であるといえる。この中核的な意味をベースに、実際の言語環境に置かれた際、内的条件や外的条件の制約を考慮しながら、話し手の認知的経験値に基づき判断を行うのが、助動詞“能”の文中の働きである。内的条件と外的条件が複雑に入り混じりながら判断を行うが、“能”を含む文の切り取り方次第で見方が異なることがあり得る。可能表現は一種の事柄に対する判断とし、先行研究で挙げた各意味項間には「ある事柄ができるか否か」といった共通概念が基盤にあるが、その共通概念を言葉として具現化するにあたって、日本語では漢字二文字の「出来る」を仮借して表し、中国語では漢字一文字の“能”を仮借して表すのが大変興味深いところである。

注

拙稿は2015年フランス・パリ第七大学で開催された学術会議「漢語語法研究と習得—句法和語義」の発表原稿に、大幅な修正を加えたものである。また、科研費（基盤研究C、代表者：安本真弓、課題番号：17K02900、課題名：「現代中国語における可能表現の学習効果—導入及び習得データに基づく実証分析」）の助成による研究成果の一部である。

- (1) 中国語で可能を表す単語として、“能”の他にも“会”、“可以”、“可能”などと多数挙げられるが、中でも“能”は使用頻度が高く、使用範囲も広いため、本稿は“能”に絞って研究対象とした。
- (2) 本稿が取り上げた例文や訳文に出典が提示されていないものはすべて自作である。
- (3) 多くの中国語先行研究のなかで、“能”は“能愿动词”または“情态动词”という類に属しているが、いずれも中国語研究者が独自に用いている文法用語であることを踏まえ、本稿のなかでは文法学者が共通認識を持って使用する「助動詞」とする。
- (4) 窦文字・窦勇著（2005）、《汉字字源—当代新说文解字》、吉林文史出版社を参照。
- (5) 吴福祥（2002）、〈汉语能性述补结构“V得/不C”的语法化〉、《中国语文》2002年第1期（总第286期）を参照。
- (6) 上記注(4)で挙げた先行研究吴福祥（2002）の中で取り上げた例文に日本語訳をつけていなかったため、引用時も訳をつけなかったことにした。
- (7) 王红卫（2008）、〈汉语情态动词“能”语法化的类型学研究〉、《淮北煤炭师范学院学报（哲学社会科学版）》第29卷第4期を参照。
- (8) 朱冠明（2003）、〈情态与汉语情态动词〉、《山东外语教学》2005年第2期を参照。
- (9) 参考文献「丁声树等（1963）、《现代汉语语法讲话》、中国语文杂志社编、商务印书馆」や、「刘月华（1980）、〈可能補語用法的研究〉、《现代汉语补语研究资料》、北京语言学院出版社」、「朱德熙（1982）、《语法讲义》、商务印书馆」など、意味項の名称に多少の違いが見られるものの、そのように唱えている。
- (10) 参考文献「吕叔湘（1980）、《现代汉语八百词》、商务印书馆」、「王伟（2000）、〈情态动词“能”在交际过程中的义项呈现〉、《中国语文》2000年第3期（总第276期）」などがそのように記している。吕叔湘説については第4章で詳述する。

- (11) 参考文献「高橋弥守彦 (2008), 「可能表現に用いる能願動詞“能”」, 『日本語と中国語の可能表現』, 日中対照言語学会, 白帝社」などが該当する。
- (12) 参考文献「胡伟 (2010), 〈西汉出土与传世文献中的情态动词〉, 《殷都学刊》2010 第3期」ではそのような分析が見られる。
- (13) 漢代の許慎によると、「假借」とは“本无其字, 依声托事”(訳: 本来はその文字がなく、声を借りて事(意味)を託す)とある。「假借」には「借形変声」と「借形借声」の2種類があり、“能”は「借形変声」にあたる。
- (14) 「意味拡張する」と度々使っていたが、本稿では参考文献「王力 (1980), 《汉语史稿》, 中华书局」の定義に従い、「本来の意味から新たな意味が生まれ、旧意味と新意味間の関係は説明できる」とする。
- (15) 王力 (1980), 《汉语史稿》, 中华书局を参考。
- (16) 『全釈〜』は『全釈漢文大系』を指す。当該書籍にはすべて日本語訳が付されており、本稿の日本語訳もこれに準ずる。
- (17) 文中の“能”について、『全釈漢文大系』では「よく」の注釈をつけている。日本語として読み下すには問題ないかもしれないが、中国語から読み解くと「できる」と訳するのが適切で、検証する必要があると思われる。
- (18) 杨伯峻・何乐士 (1992), 《古汉语语法及其发展》, 语文出版社を参照。
- (19) 安本真弓 (2009), 『現代中国語における可能表現の意味分析—可能補語を中心に』, 白帝社を参照